



名古屋大学附属図書館2015年春季特別展（地域貢献特別支援事業成果報告）

西高木家陣屋と高木家文書

西高木家陣屋跡国史跡指定記念

2月26日木 ↓ 3月18日水

〔主催〕名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室



〔高木三館鳥瞰図〕年未詳〈高木久子氏提供〉



旗本西高木家陣屋跡周辺航空写真（大垣市提供）

高木三家の屋敷周辺を描いた鳥瞰図。南北にはしる太線が伊勢街道であり、東（下側）に牧田川が流れる。中央の高台、伊勢街道の西（上側）に大きく描かれているのが西高木家陣屋である。東高木家は伊勢街道と牧田川の間、北高木家は街道と加龍谷川に挟まれたところに屋敷がみえる。西家の隣にある神社は流彦大明神（現大神神社）である。下は鳥瞰図と同じ視点でみた現在の陣屋跡周辺写真である。



屋敷図1 天保類焼前屋敷図 天保3(1832)年以前〈高木家文書〉

天保3(1832)年類焼以前の西高木家屋敷の全容を示す屋敷図。主屋の詳細な間取りと部屋名を記入するほか、周辺に点在した諸建築についても同様に記入し、高塀・石垣・空堀などを色分けする。原本は付箋が多く、建物の数次にわたる改変が確認できる。今回は最初期の状態を示すため、修復時に付箋を剥がした状態で撮影したものをパネルにした。上屋敷の南、図面の中央にはまだ下屋敷はなく「御隠居屋敷跡」とあるのがわかる。



参考 天保類焼前屋敷図 天保3(1832)年以前〈高木家文書〉

付箋を貼り付けた状態の屋敷図1である。「御隠居屋敷跡」に下屋敷が建設されているのが付箋により確認できる。このほか、万寿院(西家7代衛貞次男の貞直)が宝暦5(1755)年6月に逝去した後に明地になった場所および明和子年=明和5(1768)年の大破によりたみ火除けの明地とした場所も付箋により確認ができる。

176×276cm



屋敷図 2 天保再建上屋敷図 天保 3 (1832)年頃 〈附属図書館所蔵〉

類焼後の天保 3 (1832)年再建時に関する西高木家の上屋敷図である。作成年の記載はないが、嘉永 5 (1852)年建造の下屋敷が記載されていないこと、大奥北側部分の諸室が安政 4 (1857)年改修前の平面構成を示すこと、「仮玄関」、「表仮門」の記述から再建時の屋敷図と判断した。屋敷の間取りと畳枚数、方位を記し、石垣や庭園の描写は詳細である。

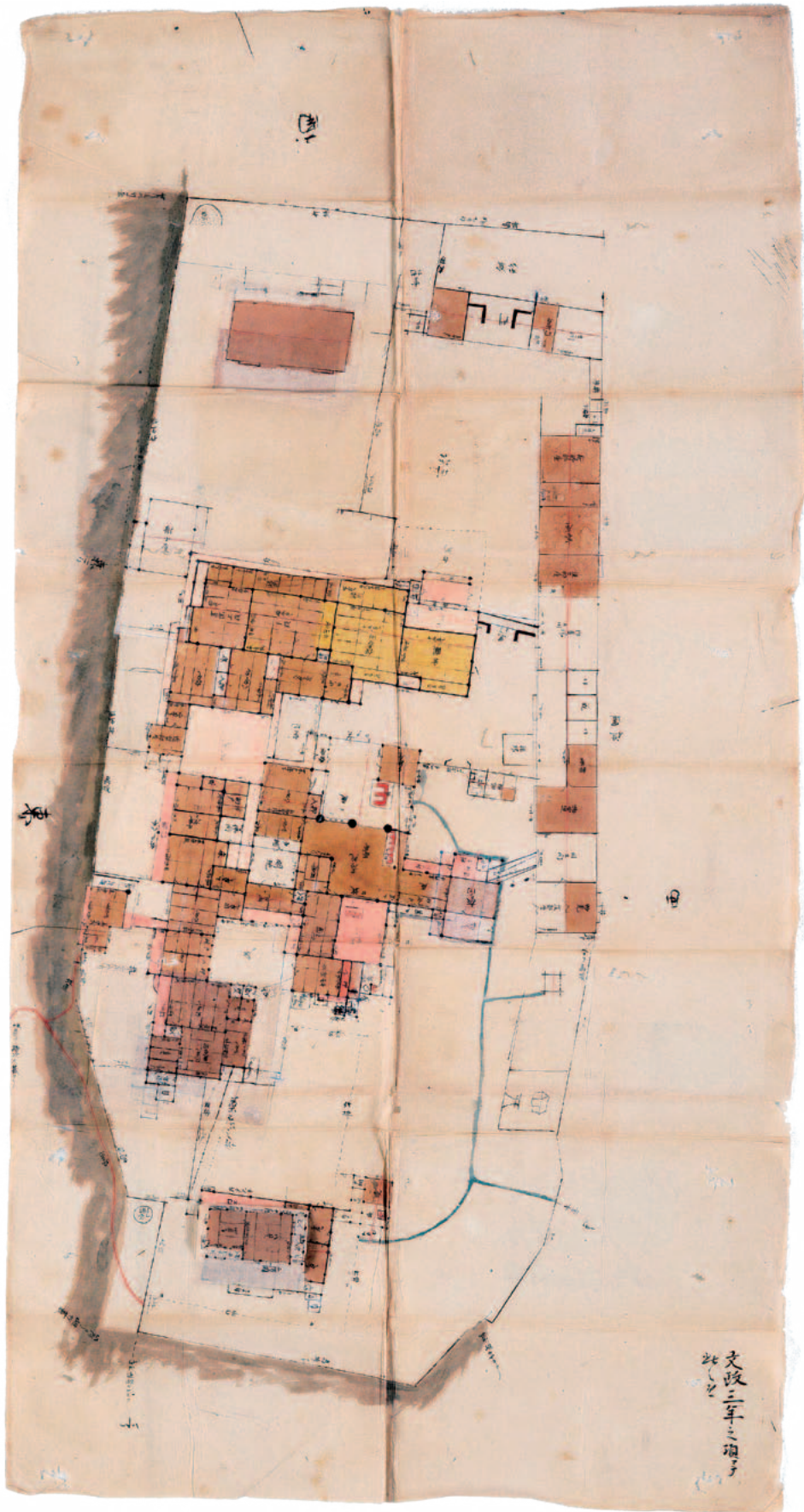
196×163cm



屋敷図3 安政普請屋敷図 安政4(1857)年頃〈大垣市所蔵〉

上屋敷と下屋敷の二つの主屋が存在し、間取りと畳枚数、方位を記す。上屋敷の奥北面諸室、上屋敷主屋東の長屋、下屋敷の玄関・台所の間取り形状から、天保再建以降飛躍的に拡大した、安政期頃の西高木家屋敷の全容を示す屋敷図とみられる。【屋敷図2】からの変化を見比べて欲しい。数少ない旗本屋敷図として、東京帝国大学の黒板勝美が昭和5(1930)年に借用し影写しており、そのときの借用書が共に伝わる。

220×265cm



33 〔東高木家屋敷図〕 文政3(1820)年頃〈筒井稔氏所蔵〉

東高木家の屋敷を描いた数少ない絵図。「文政三年之頃マテ此之通」とある。西側に往還（伊勢街道）がはしり、南面に門を配置する。敷地中央に位置する屋敷の各部屋の名称や広さがわかる。

2015年春季特別展開催にあたって

大垣市上石津町字宮に所在する「旗本西高木家陣屋跡」は、名古屋大学附属図書館が所蔵する「高木家文書」の旧蔵者である西高木家の陣屋跡になります。陣屋跡には、高大な石垣や一族の墓石群、主屋や長屋門などの建造物が今に残されており、大垣市が文化財としての保護・活用に向けた整備に取り組んだ結果、2014年10月に国の史跡に指定されました。これを記念して、名古屋大学附属図書館及び附属図書館研究開発室では、当館所蔵の「高木家文書」の中から西高木家陣屋に関する屋敷図や古文書を展示し、その歴史の変遷を紹介いたします。

西高木家陣屋跡を史跡として評価するにあたって、発掘調査による遺構の確認とともに「高木家文書」の分析から陣屋の歴史の変遷が明らかになったことが、大きな意味を持ちました。旗本の陣屋跡と伝来文書群がそろって現存する例は全国的にみても珍しく、西高木家陣屋跡は、「高木家文書」の存在により、その変遷と価値が明らかとなる稀有な史跡であるといえます。今回、西高木家陣屋跡に関するこれまでの調査・整理事業において活用された「高木家文書」を広く公開することで、新たな文化財への理解を深める手助けになれば幸いです。

最後になりましたが、今回の特別展にご協力くださいました大垣市教育委員会ならびに関係のみなさまに対し、厚くお礼申し上げます。

2015年2月26日 名古屋大学附属図書館長
同附属図書館研究開発室長
教授 佐野 充

高木家陣屋

高木家は、もとは養老山地東部一帯に勢力を張る土豪で、関ヶ原合戦後に近江・伊勢と国境を接する美濃国石津郡時・多良両郷（現岐阜県大垣市上石津町域）に領地を宛行^{あてが}われて以降、明治維新まで同地を支配し続けた旗本である。

旗本高木家は、名古屋大学附属図書館所蔵文書を伝えた西家（2300石）のほか、分家である東家（1000石）、北家（1000石）の三家からなり、江戸に常駐した一般の旗本とは異なり知行地に在住して参勤交代をおこなう交代寄合美濃衆として大名並の格式を付与されていた。とくに、幕命により木曾三川流域を管理する川通御用の役儀を勤めたことで知られる。また、西家の当主は、維新後も同地に居住し、学区取締や郡長・衆議院議員などの公職を歴任した。

高木三家の陣屋（小大名や交代寄合の屋敷のこと、城に準じる）は揖斐川の支流である牧田川が形成した河岸段丘上に位置した。伊勢街道沿いの一段高位に西家の陣屋が営まれ、隣接して東家・北家が陣屋を構えた。西家・東家・北家の通称は伊勢街道をはさんだ陣屋の位置関係に由来する。

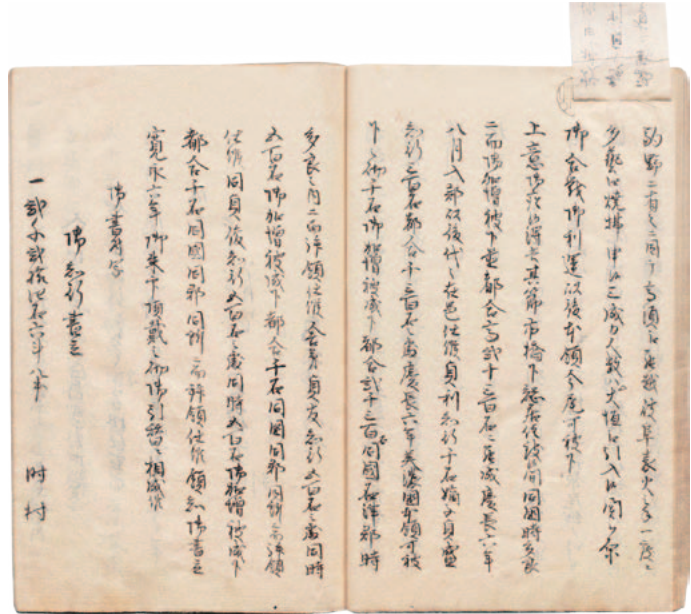
西高木家の陣屋周辺は石垣で巡らされ、街道から眺めると城郭を彷彿とさせる。段丘上の北側に上屋敷、南側に下屋敷が配置され、上屋敷の西側一角には一族の墓地がある。屋敷は明治維新以降、徐々に改変・縮小され、現在は旧上屋敷地に主屋と長屋門、土蔵が残る。建造物調査報告書によると、主屋は天保3（1832）年再建の上屋敷奥棟の「中奥」を中心に再編されたもの、長屋門は嘉永5（1852）年建造の下屋敷御門を移築したもので、旧地に残る交代寄合の陣屋建築の現存例として、貴重な遺構であるという。

なお、多良を離れた東家と北家の陣屋跡については遺構がほとんど残っていない。東高木家は土蔵1棟が現存するのみで、北高木家については陣屋跡に道路が敷設されたこともあり、わずかな石積みが残存するのみである。

1 先祖書

弘化3(1846)年8月〈高木家文書〉

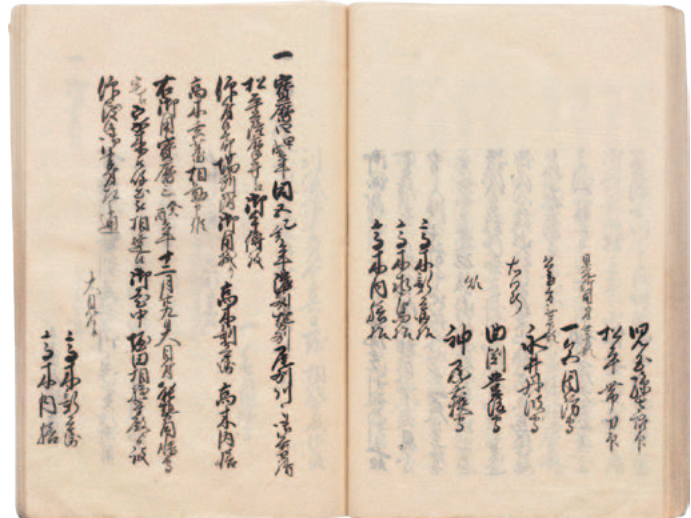
高木家初代貞政から11代経貞までを記録した西家の「先祖書」。幕府へ提出した控である。高木三家は、斎藤道三に属した貞政を共通の祖とし、織田信長等に従った2代貞久の次の代に西家(貞利)、東家(貞友)、北家(貞俊)にわかれた。三家は関ヶ原合戦の軍功により時・多良の内に都合4300石を拝領し、慶長6(1601)年に入部して以降、代々この地を支配した。



2 先祖代々川通持場其外御用勤書

安政2(1855)年7月〈高木家文書〉

高木三家は、寛永元(1624)年の筵田・真桑用水論所見分を皮切りに、木曾三川流域の治水・用水について美濃郡代を補佐する重要な役割を担い、18世紀以降は郡代と同等の権限を有する川通掛(水行奉行)に任命され、流域の水政をつかさどった。本資料は、高木三家が役儀として勤めた治水関係の「御用」を年譜的に書き上げたものである。



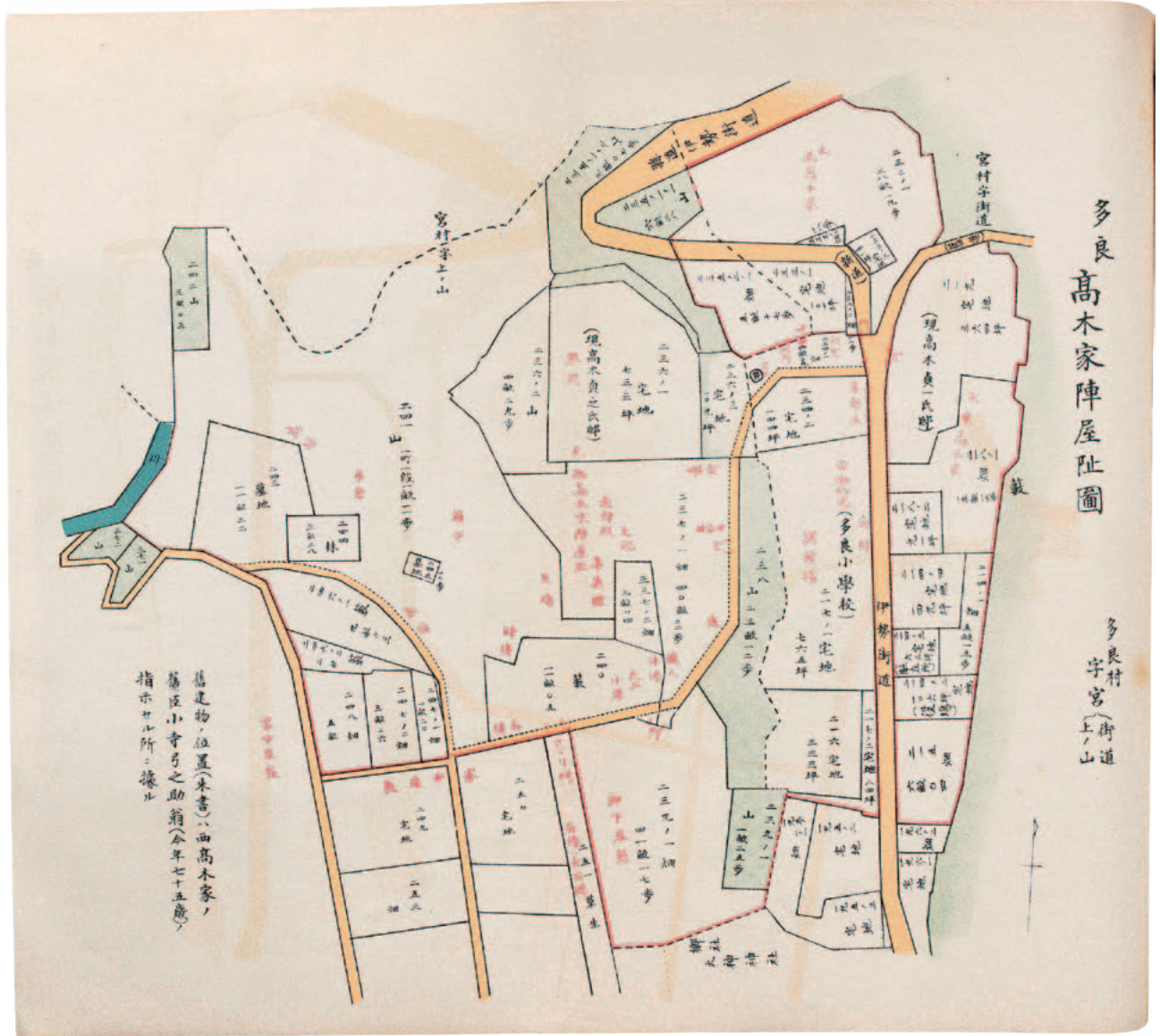
3 樋口好古『濃州徇行記』

平塚正雄編・昭和12(1937)年刊行
 〈附属図書館所蔵〉

尾張藩士の樋口好古が領内を巡見した際の記録である「郡村徇行記」。村々の沿革や現状が記された地誌であり、『濃州徇行記』は寛政年間(1789~1801)の編纂とされる。「美濃国御領分岐早奉行所部」のなかに多良村に関する記事があり、高木陣屋について「館を山の峰に構へ下よりみあげ殆んど城郭に彷彿たり」と驚きをもってその様子を記している。



主屋東石垣



4 多良高木家陣屋跡図 昭和3(1928)年発行〈附属図書館所蔵〉

『岐阜県史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第三回到掲載された付図。西家旧家臣の小寺弓之助の証言により、かつての建物の位置が朱書で記されている。戦前の高木三家の陣屋跡の遺構を示す貴重な図である。

報告書では陣屋跡の現状について以下のように記述されている。

西高木家現戸主高木貞元氏の現住居地は旧陣屋の北方の一区域(丘陵上)にして、其の本宅は明治後の新築なれども、奥座敷は旧陣屋の奥殿なり。又表門は旧下屋敷の門を其の儘移転せるものなり。旧枡形の遺構・埋門跡・古井等、昔ながらの面影を存せり。枡形の石垣の上に「高木三家入郷之処^(ママ)」と刻せる碑を建つ。

現宅地以外の地は概ね畑・山・林・藪となりたれど、略ぼ当年の遺構を窺ふべし。訓練場跡は現今多良小学校となれり。

東高木家の現住居地はまた同じく旧陣屋の北方の一区域にして、其の南方に村役場・巡査駐在所・購買組合事務所等あり。現戸主は高木貞一氏なり(現今大阪在住、旧臣某留守居せり)

北高木家は明治の後廃絶し、旧陣屋跡は現今畠となり、民家二戸在住せり。右高木家現住居地なる旧陣屋跡は、旧幕府時代旗本陣屋の典型として其の遺構を窺ふに足るを以て、保存要目史蹟の部第四又は第八に該当するものと認む。



西高木家陣屋の変遷

西高木家陣屋は、天保3(1832)年3月4日に発生した北高木家陣屋の火災に類焼して、土蔵等を残し主要な建物をほぼ焼失してしまう。その後の再建・拡張、そして維新後の変遷については「高木家文書」に残された屋敷図や古文書から追うことができる。類焼した上屋敷の再建は直ちに着手され、同年12月13日に当主経貞をはじめとする一家が新築の屋敷に移っている。下屋敷とその御門は嘉永5(1852)年に造営され、さらに安政4(1857)年9月に嫡子貞広が妻を迎えるにあたって屋敷の改修がおこなわれた。

再建・拡張された屋敷は、明治維新後規模を縮小していく。明治5(1872)年から不要な建物は撤去・払い下げられ、屋敷は旧上屋敷の奥棟を中心に再編された。さらに明治29(1896)年の改修によって主屋は一部が切り組み直された。下屋敷の御門は上屋敷へ^ひ曳かれ、これが現存する長屋門である。

【屋敷図1】

寛政頃	1789～1801	『濃州徇行記』に「殆んど城郭に彷彿たり」と記される
文化9	1812. 8. 4	11代経貞襲封
天保3	1832. 3. 4	北家屋敷の火災により西高木家屋敷が類焼する
	5. 7	^{ておのはじめ} 新初、上屋敷の再建に着手
	12. 3	仮住居から新屋敷に移る

【屋敷図2】

嘉永5	1852. 2. 3	新初、下屋敷・御門の普請に着手
安政4	1857. 9.28	貞広に嫁入、これにともない上屋敷・下屋敷を改修

【屋敷図3】

万延2	1861. 6. 4	12代貞広襲封
慶応元	1865.	^{うずみもん} 埋門高塀修覆
明治2	1869.12.	旗本の禄制改革で知行地を上知され士族となる
明治4	1871. 8.	13代貞正襲封
明治5	1872	建物の払い下げが始まり旧上屋敷の奥棟を中心に再編される
明治29	1896.	主屋の大改修
明治35	1902.11. 2	「高木三家入郷地」碑の除幕式
大正9	1920. 3.	14代貞元襲封
昭和3	1928.	多良高木家陣屋趾図【4】
平成26	2014.10. 6	国史跡に指定される

5 御用日記（屋敷類焼の記事） 天保3（1832）年3月4日条〈高木家文書〉

西高木家陣屋は、天保3（1832）年3月4日に高木玄蕃（北家10代貞明）の屋敷より発生した火災により、土蔵等を残して上屋敷から下屋敷までの主要な建物をほぼ焼失してしまう。御用日記には火災の発生から避難、防火、類焼箇所、そして幕府への報告まで経緯が克明に記される。



6 〔類焼につき書状留〕 天保3（1832）年〈高木家文書〉

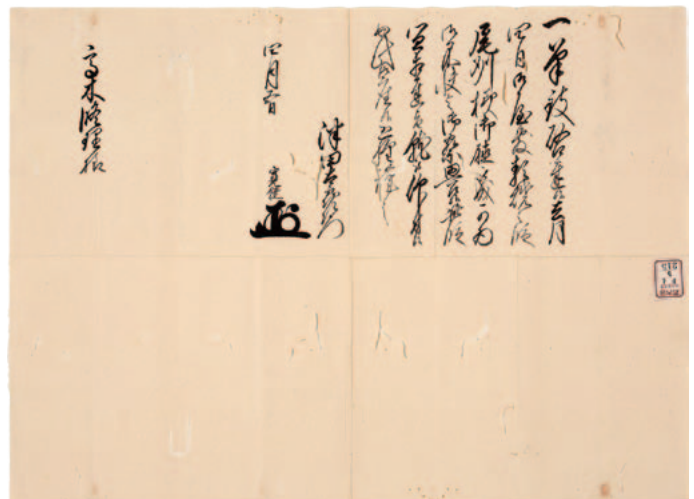
高木修理（西家11代経貞）が屋敷類焼を各家に報告した書状の留書き。表奥住居・侍中間部屋、表門、櫓門、裏門、塀重門、大蔵、長屋、稽古小屋、廐、通用路次、惣囲、下屋敷とその門、さらに家中屋敷1軒を類焼し、甚大な被害を受けたことが知り得る。



7 〔尾州よりの屋敷類焼見舞につき奉書〕

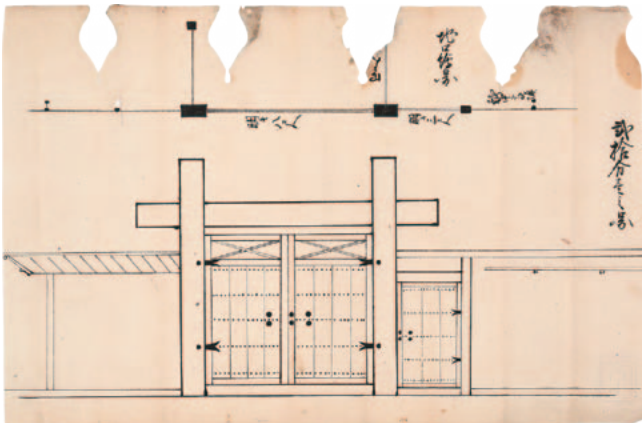
天保3（1832）年4月5日〈高木家文書〉

尾張藩用人の津田太郎左衛門寛鏡が藩主の意を受けて高木修理に送った屋敷類焼見舞の書状。



8 差上申御請書之事（職人の請書） 天保3（1832）年5月〈高木家文書〉

陣屋類焼後、程なくして上屋敷の再建がはじまる。4月に台所・居間・書院・御門などの普請入札があり、5月7日に^{ておのをはじめ}新初（仕事始めの儀式）がおこなわれた。この史料は「表御居間」の普請を落札した近江国坂田郡樋口村の大工・伊兵衛の請書である。7日より作業をはじめ11月を期限としている。



9 〔^{かぶきもん}冠木門建絵図〕

天保3（1832）年〈高木家文書〉

上屋敷の再建に関わる冠木門（二柱の上部に横木を渡した門）の二十分の一図。脇戸（くぐり戸）の位置が一致することから【屋敷図2】にみえる「表仮門」と思われる。

10 当三月四日御類焼二付尾張様江御材木御金等御拝借御願一件留

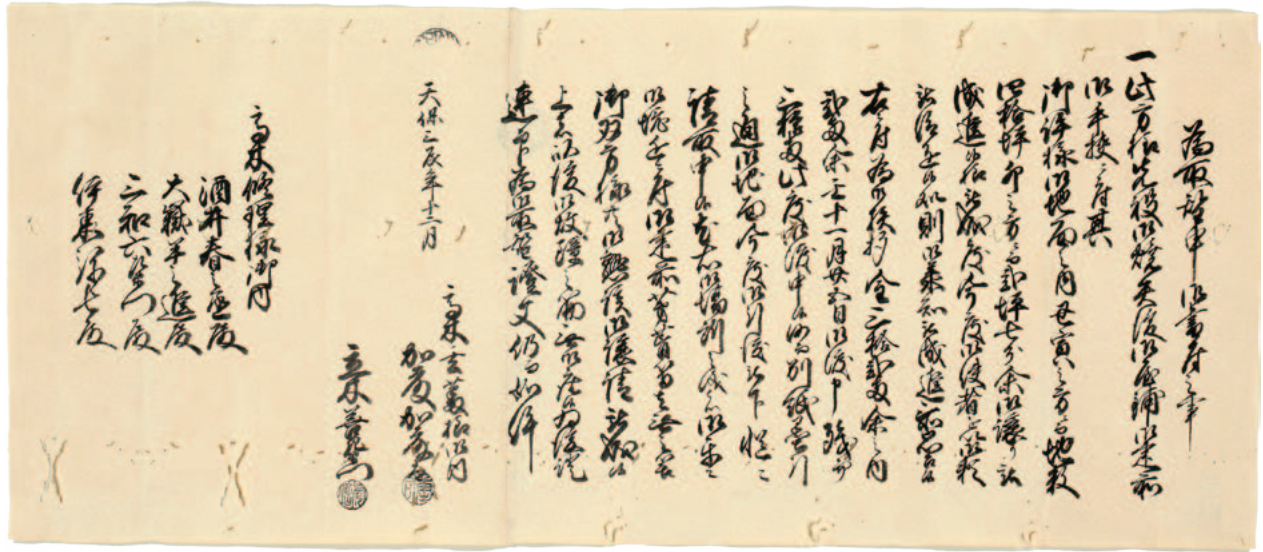
天保3（1832）年〈高木家文書〉

西高木家は再建工費を捻出するため、尾張藩に金100両分の材木を代金年賦上納にて頂戴したいと願い出る。4月からの交渉で9月によく金50両分の材木を拝借できた。屋敷再建にともなう高木家の財政悪化は領民の負担増大をもたらし、弘化2（1845）年に多良9ヶ村百姓一揆が勃発した。



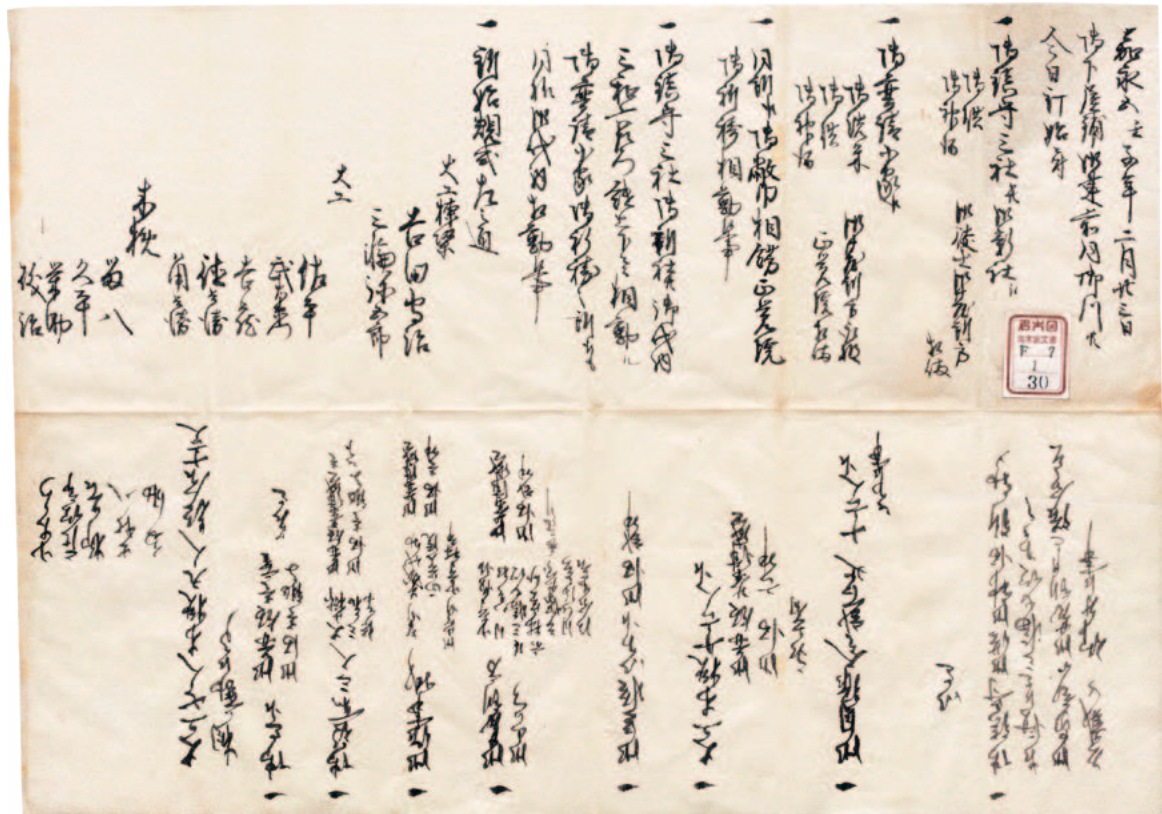
11 為取替申御書付之事 天保3(1832)年12月〈高木家文書〉

北高木家が焼失した屋敷再建にあたって手狭のため、隣接する西高木家の土地42坪余を金32両余で譲り受けたときに取り交わした証文。譲渡した土地は西家陣屋の東北、埋門の裏40坪と埋門西2坪の二筆である。陣屋の境界を示す貴重な史料。北家はこの後も西家から土地の譲渡・拝借を繰り返していく。



12 〔下屋敷建前につき覚〕 嘉永5(1852)2月23日〈高木家文書〉

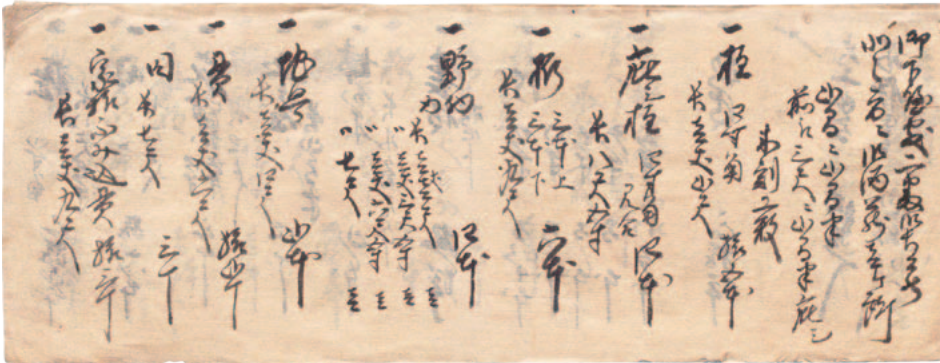
類焼した下屋敷と御門は嘉永5年に再建される。作業は前年から始まり、2月23日に新初の儀式がおこなわれた。史料はその規式を記したもので、大工棟梁の吉田専治(武太夫)、三輪弥五郎以下、大工5名、木挽9名が勤めた。このとき建設の御門が現存する長屋門であり、明治期に現在地へ曳かれた。



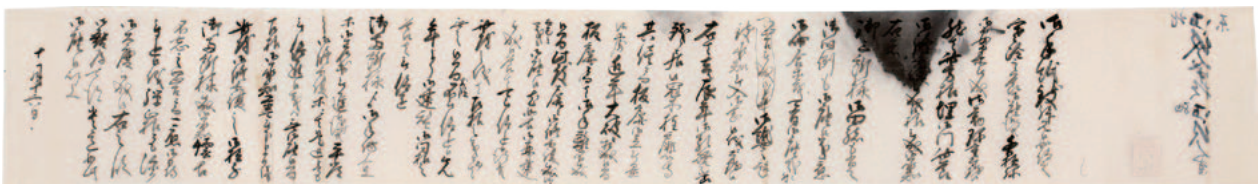
13 御下屋敷新規御目論見御普請取調書

安政5(1858)年3月〈高木家文書〉

安政4年9月28日に高木経貞の嫡子である貞広(後の西家12代)が紀州から妻を迎えるにあたって上屋敷の大奥居室や下屋敷の玄関・台所周りなどの改修がなされた。さらに翌年にも下屋敷の普請があり、酒蔵や女中部屋が新たになった。【屋敷図3】は安政普請頃の西高木家陣屋を描いたものである。



14 〔埋門修覆につき書状下書〕^{うづみもん} 慶応元(1865)年10月16日〈高木家文書〉



西高木家陣屋の埋門の修覆に対して東・北の両家が家が話し合いを求めてきたことに対する西家の回答。東・北家が「御三所様御由緒」がありその修覆には「御旧例」があると主張しているところが興味深く、埋門が三家の象徴とされていたことがうかがえる。西家は、板塀を直すだけのことなので古のように再建するならば両家へも相談すると答えている。



埋門跡周辺石垣

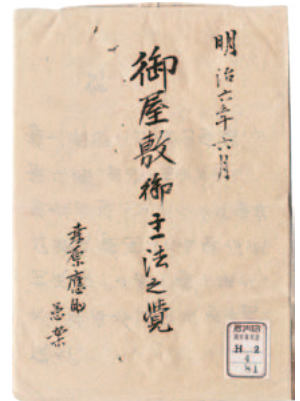
15 差入申御請書之事

明治5(1872)年8月29日〈高木家文書〉
類焼以降、整備・拡張された屋敷は、明治維新後、規模を縮小していく。明治5年頃から不要な建物は順次払い下げられていき、物置、長屋、土蔵などが撤去された。史料は宮村の宅右衛門が長屋1箇所を代金36両2分で払い下げを受けたときの請書。



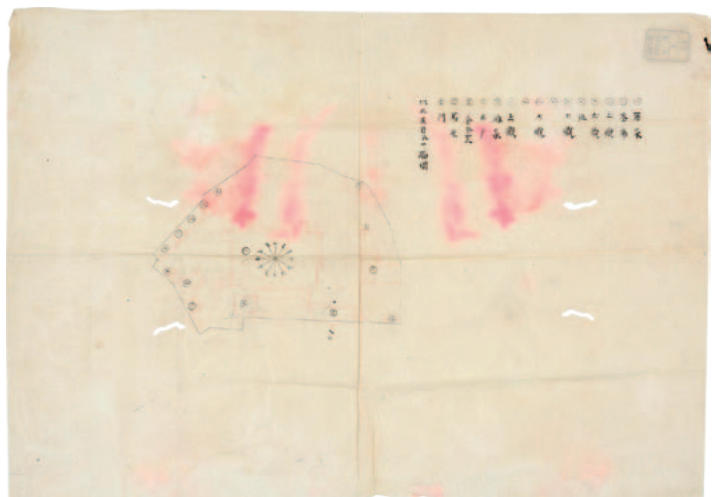
16 御屋敷御主法之覚 明治6(1873)年6月〈高木家文書〉

明治4年に高木家を継いだ真正(西家13代)のもと進められた屋敷の再編計画案。旧上屋敷の奥棟を改築して住居とすること、跡地は茶園として開拓すること、下屋敷撤去後は下屋敷御門を曳くことなどが記される。



17 [明治再編屋敷図]

明治期〈高木家文書〉
明治5年以降再編された屋敷図。居家(一)は天保3年再建の旧上屋敷奥棟を改修したもの。敷地は旧上屋敷の北半分に縮小された。養蚕室(十三)は跡地の茶園開拓にともなう建物で、古写真の長屋門右奥に養蚕室とおぼしき屋根が写っている。





西高木家屋敷全景（古写真）



現存の長屋門



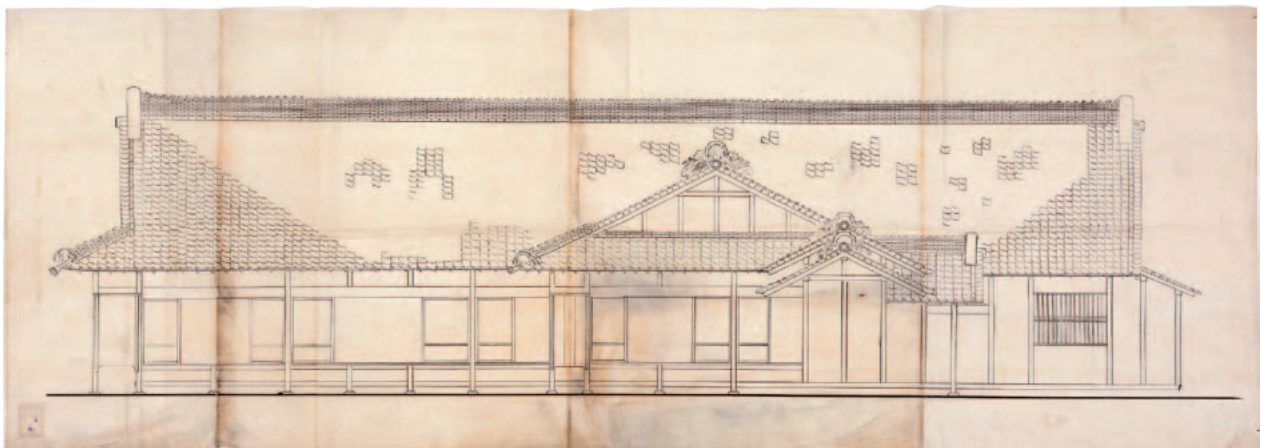
東高木家旧邸（古写真）



現存の東高木家土蔵

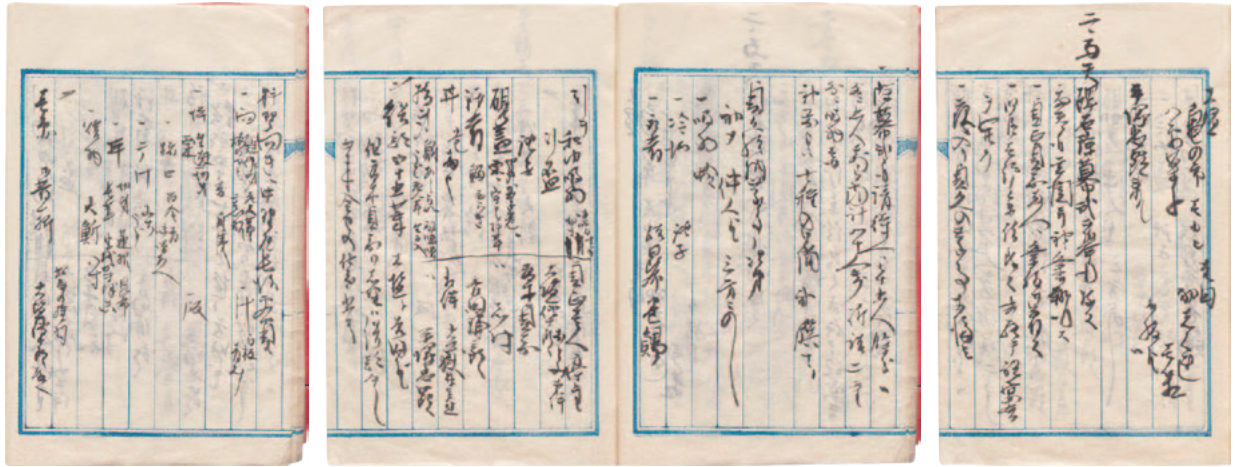
18〔居家立面図〕 明治期〈高木家文書〉

現存の主屋と類似した屋敷の立面図である。現存主屋は明治5年頃から居家とした旧上屋敷奥棟の一部を切り組み直すことで縮小したものであることが近年の調査で明らかとなっている。



19〔高木貞正の日記〕 明治35(1902)年11月2日条〈高木家文書〉

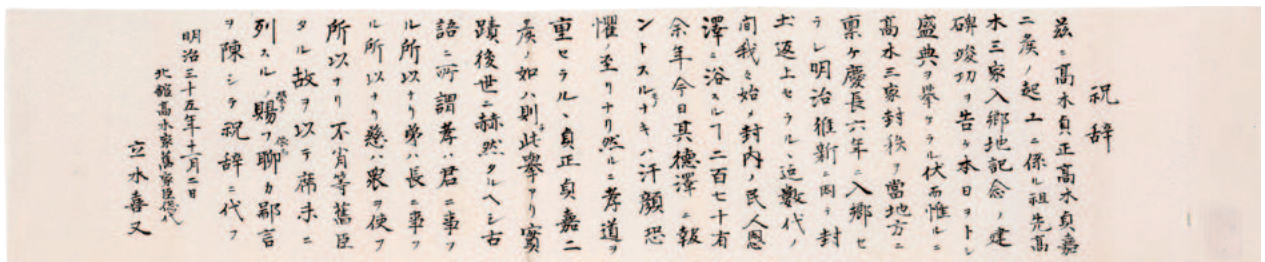
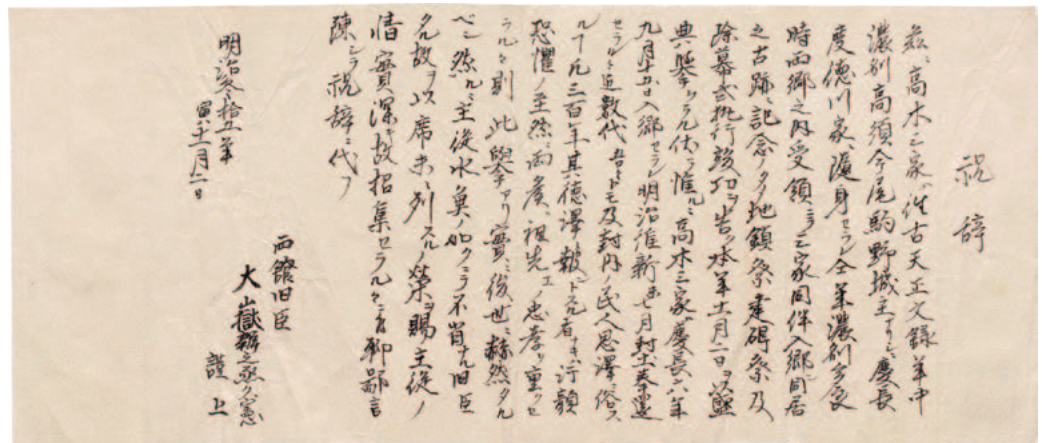
高木貞正（西家13代）と高木貞嘉（東家13代）は旧埋門横の石垣上に「高木三家入郷地」碑を建立し、明治35年11月2日に除幕式を挙
行した。貞正自筆の日記には雨天のなか両家当主と旧家臣たちが集った様子が記される。



「高木三家入郷地」碑

20,21 祝辞 明治35(1902)年11月2日〈高木家文書〉

石碑の除幕式における旧家臣の祝辞。「高木三家入郷地」碑は、関ヶ原戦後の慶長6（1601）年に高木三家が時・多良へ入郷してから300年を記念して建てられた。なお、立木喜又は北家の旧家臣であるが、すでにこのとき北家当主は多良を離れていた。



西高木家墓所

西高木家陣屋跡の西側一角に西家の墓所が存在する。【屋敷図1】に「御廟」と書かれた場所であり、古文書では「西御廟」と呼ばれる。慶長8（1603）年に逝去した高木家3代貞利（西家初代）を葬ったのを始まりとする。南側入口から入って正面に貞利の墓を設け、崖を背に扇状に貞利墓を囲むように一族の墓が配置されていった。また、18世紀後半になると正林寺を菩提寺として廟所が形成され、同時期に岡山（上石津町欄宜上）にも墓域が形成された。御廟の墓は小さく成墳した墳墓を葺石で囲むタイプで当初は墓石はなかった。それが18世紀後半以降、墓石（古文書では石碑と呼ばれる）や供養塔、夭死した子への石仏（地藏尊座像）が集中的に建てられ、13代貞正の時代に一族すべての墓石が揃った。現在では御廟に43基、岡山に5基、正林寺に20基の石碑や石仏が林立している。



西高木家廟所（大垣市提供）

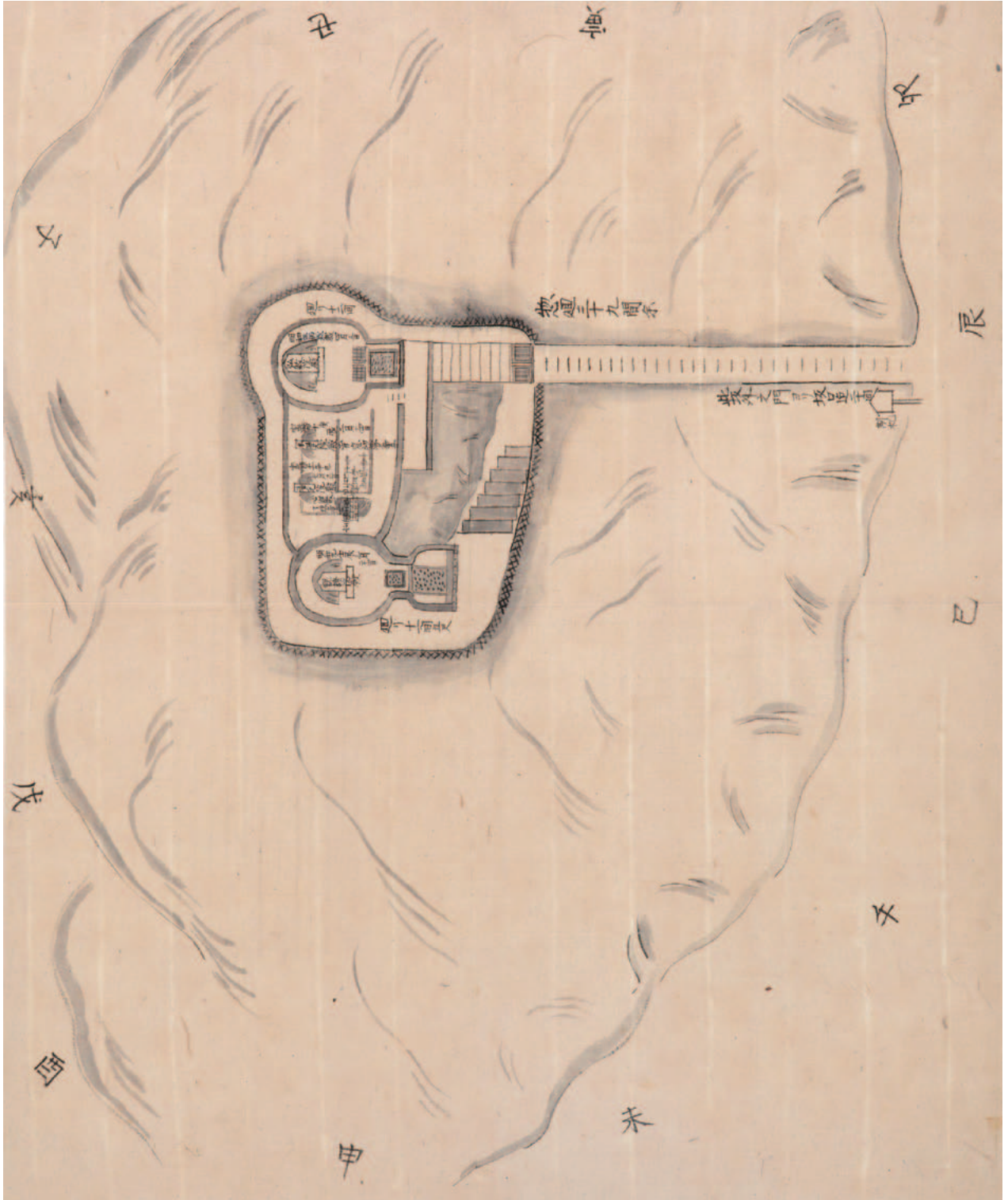


西高木家初代貞利（覚法院）の墓（大垣市提供）

宗廟并岡山墓所図 貳枚 明和9(1772)年仲冬〈高木久子氏所蔵〉

陣屋西側一角の廟所(20頁)と上石津町禰宜上字岡山の墓所(21頁)を描いた絵図。西高木家墓所を描いた絵図は他に例がなく、土塁状の高まりによって区画された当初の墓の配置が判明する。10代貞臈^{さだよし}の時代の作成になる。貞臈は歴代当主の墓に石碑(墓石)を建立するなど墓所を整備した当主であり、この絵図も墓所整備の一環として作成されたものであろう。





22 御用日記（七基の石碑建立） 天明4（1784）年8月29日条〈高木家文書〉

高木貞臧（西家10代）は御廟に葬られている歴代当主の石碑建立に着手し、西家の初代である3代貞利（覚法院）、4代貞盛（鉄樹院）、5代貞勝（真泉院）、6代貞則（済生院）、7代衛貞（泰了院）、8代貞輝（亮鏡院）および貞照院（貞勝室）の石碑計7基をそれぞれの墳墓の前に安置し点眼供養を執りおこなった。これにより御廟は石碑建立型へと変貌を遂げることになる。



23 御用日記（御先祖様の石碑建立） 文政11（1828）年10月晦日条〈高木家文書〉

高木経貞（西家11代）は時・多良郷入部以前の先祖の石碑を2基建立する。高木三家共通の元祖である貞政（覚林院）と2代貞久（寂照院）の石碑および貞政の嫡子でありながら多病のため跡を嗣がなかった貞次（法輪院）と貞久の嫡子で戦死した貞家（無心院）の石碑である。家意識の高揚と先祖崇拜の高まりを背景に元祖以来の石碑（墓）が御廟に揃ったのである。

19頁の写真「西高木家廟所」にみえる唐破風の笠を載せて並置する2基が経貞が新たに建立した先祖の石碑である。向かって右が覚林院・寂照院墓、左が法輪院・無心院墓。



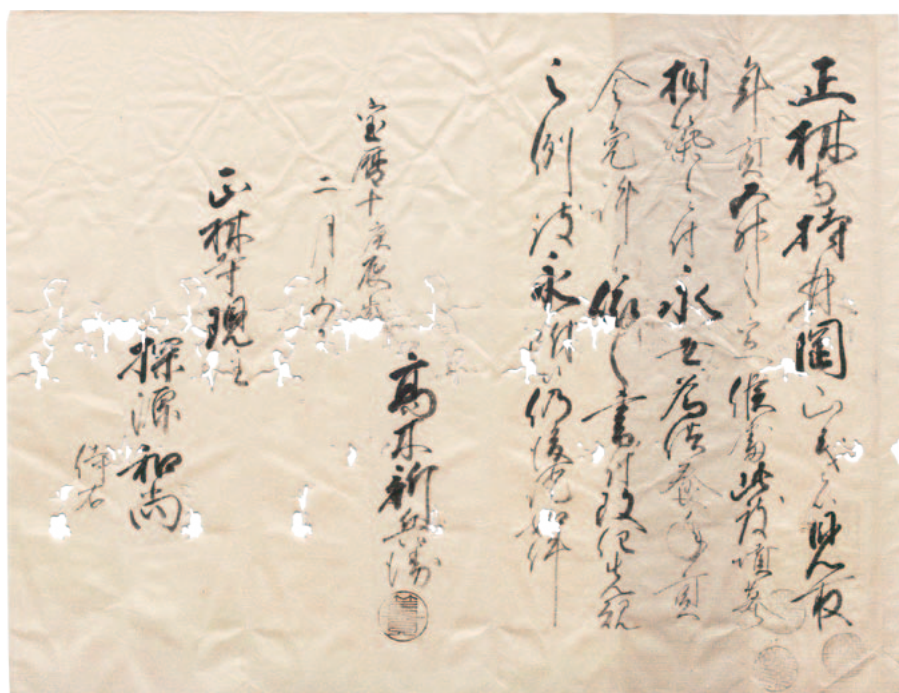
24 覚法院様式百五拾回御忌御祭祀取調帳 嘉永5(1852)年7月〈高木家文書〉

高木経貞は元祖以来の石碑を整備するとともに、西家初代にあたる貞利(覚法院)の石碑を嘉永5(1852)年の250回忌にあたって建て替えた。現在みられる唐破風の笠付の荘厳な石碑(写真参照)はこのとき建てられたものである。



25 〔正林寺持林岡山年貢免除証文〕 宝暦10(1760)年2月15日〈高木家文書〉

宝暦10年2月14日に西家9代篤貞の女(本覚院)が亡くなったとき、篤貞の思召により正林寺の持林である岡山に御廟所が定められ、その翌日、篤貞は永世供養のため年貢免除とした。後に篤貞自身も岡山を墓所とする。



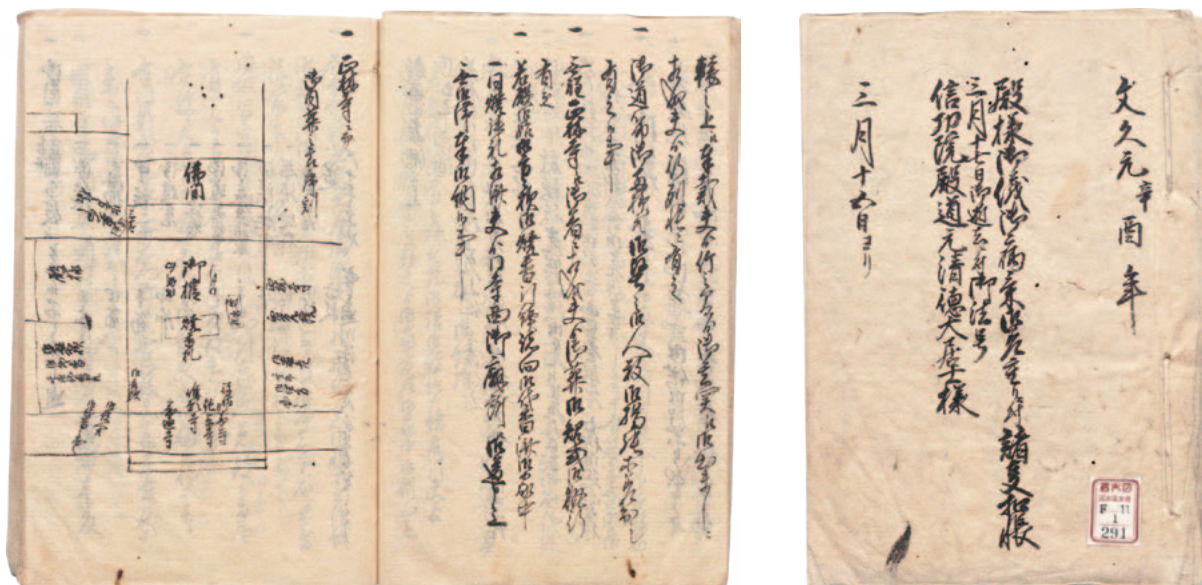
26 浄行院様御石塔ノ形 弘化3 (1846)年7月5日〈高木家文書〉

弘化2年8月21日に亡くなった浄行院（西家12代貞広室）の石碑（墓石）の仕様書である。浄行院は正林寺の墓所に葬られ、一周忌にあわせて石碑が建立された。



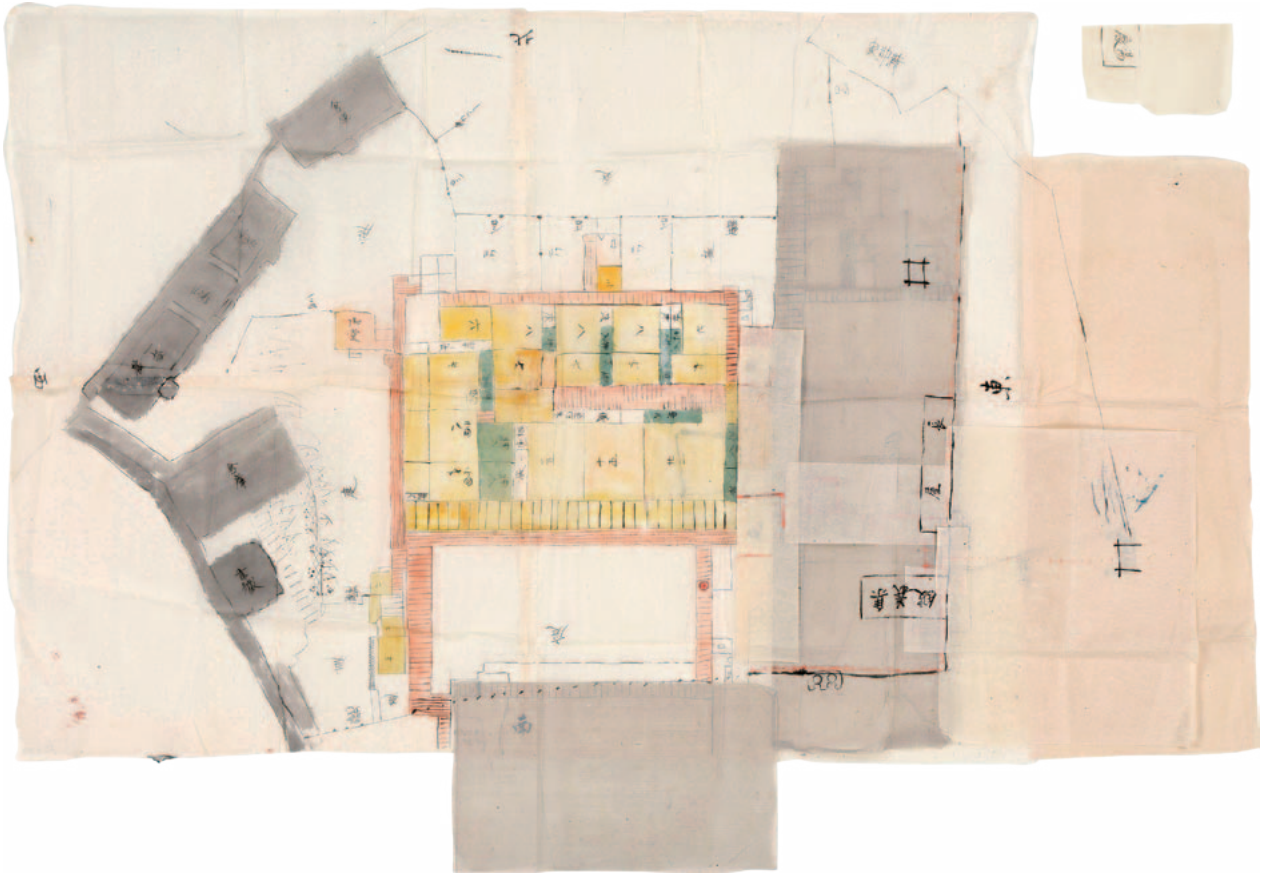
27 殿様御儀御病氣御差重り二付諸事扣帳 文久元(1861)年3月15日ヨリ〈高木家文書〉

文久元年3月16日に亡くなった高木経貞（西家11代）の死去から葬儀、忌明けまでを書き留めた記録。史料は20日の正林寺における内葬の席割の図である。歴代当主では経貞のみが正林寺に墓がある。



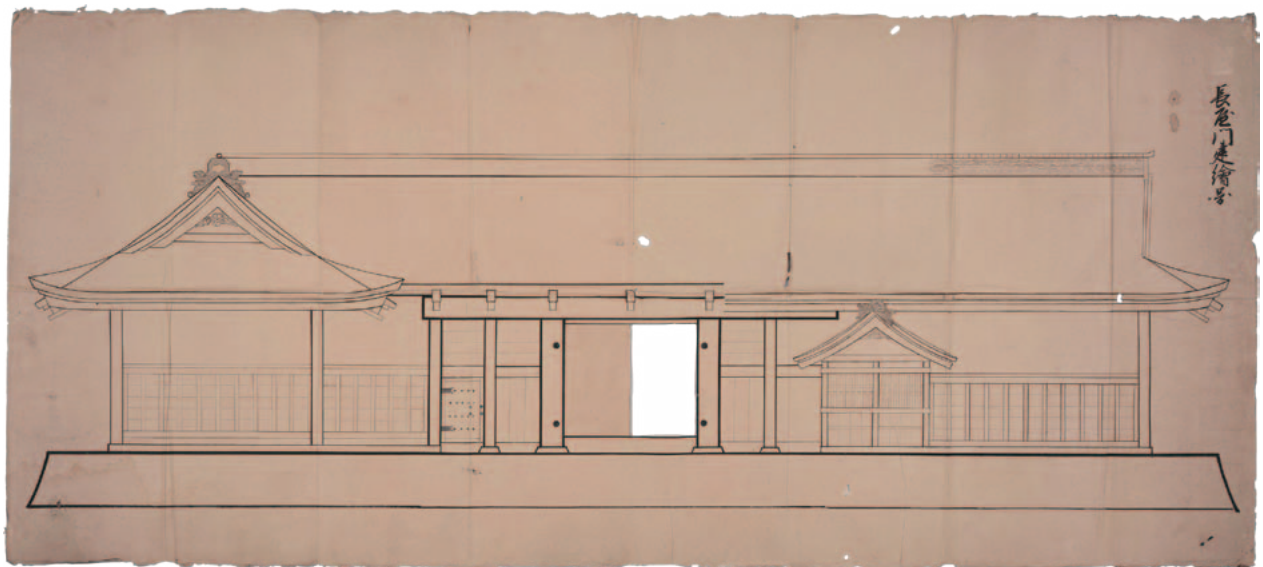
28〔建物図面〕 明治期〈高木家文書〉

明治期の屋敷改修の計画図。天保再建上屋敷の奥棟を残し、東側の台所棟を撤去した跡地に長屋、集義館（幕末建造の稽古場）を配置することが検討されている。



29 長屋門建絵図 江戸後期〈高木家文書〉

長屋門の立面図。正面右側に出格子を描き、左側に側立面を重ねて描いている。上屋敷再建直後の表仮門から表門に改修する際の計画図の可能性も考えられる。



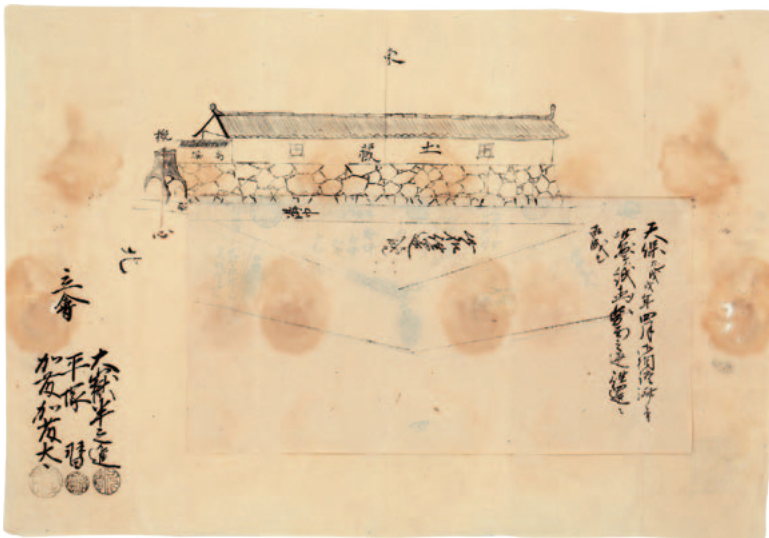
30 為取替申御書付之事 安政5 (1858)年4月11日〈高木家文書〉

高木鑄寿丸（北家18代貞栄）が高木修理（西家11代経貞）より、埋門裏の両家が接する屋敷地225坪5分7厘を借り受けた際の証文。別紙の絵図には、両家の地面、天保3（1832）年の譲地【11参照】、天保15（1844）年に高木修理の女が高木貞郷（北家16代）へ嫁いだ際の附地、そして今回の貸地がそれぞれ色分けて描かれている。

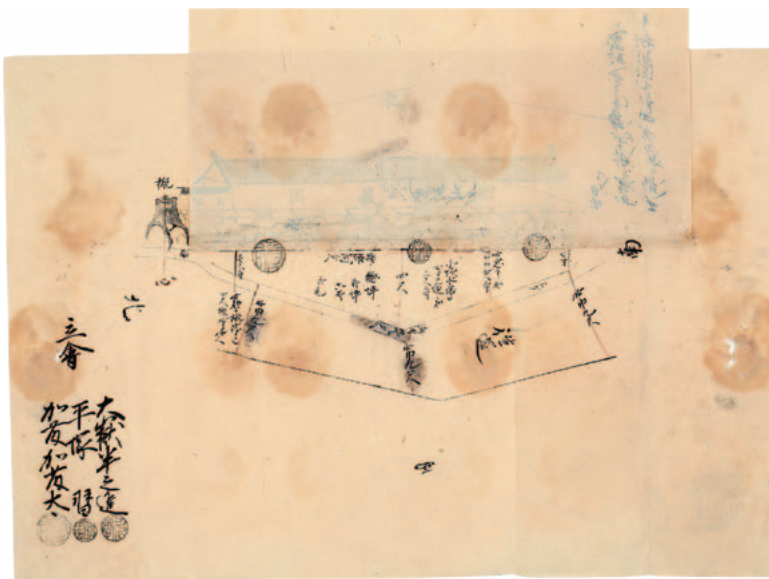


31〔取替わし証文〕 天保9(1838)年4月〈高木家文書〉

高木大内蔵(東家11代貞教)の抱屋敷地の内、土蔵石垣横2坪6厘2毛を提供して往還(伊勢街道)を拡張するが入用の節は元に戻すことを約した証文。高木修理(西家11代経貞)の提案によるもので、平塚は東家、加藤は北家、大嶽は西家の家臣である。



別紙の絵図



付箋をあげた状態

32 土岐郷風景 文久2(1862)年〈高木家文書〉

高木家の知行地である美濃国石津郡時・多良郷の内、時郷の景観を描いた絵図。西家12代の高木貞広が家督相続にともなう領内巡見をおこなった際に作成された。



参考：1986年撮影の「高木三家入郷地」碑、長屋門・主屋〈研究開発室所蔵〉



名古屋大学附属図書館
附属図書館研究開発室

館長・室長 佐野 充
特任准教授 石川 寛
研究協力 長屋 隆幸
辻 公子
早川 駿治

調査・展示協力

大橋 正浩
高木 久子
筒井 稔
田中 厚司

大垣市教育委員会

(敬称略、順不同)

事務担当

情報サービス課長 次良丸 章
同課長補佐 黒柳 裕子

名古屋大学附属図書館2015年春季特別展（地域貢献特別支援事業成果報告）

西高木家陣屋と高木家文書

— 西高木家陣屋跡国史跡指定記念 —

会期：2015年2月26日（木）～3月18日（水）
9時～17時（土日も開室）

会場：名古屋大学中央図書館2階ビブリオサロン

主催：名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

本図録の執筆・編集は石川寛が担当し、大橋正浩氏に監修をお願いした。
本図録の資料番号は展示資料番号と一致するが、掲載は陳列順とは限らない。
参考資料は図録のみの掲載である。典拠を示していない写真は石川の撮影による。
展示準備および図録執筆にあたっては次の参考文献に多くを依拠した。

『岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡 主屋等建造物調査報告書』 大垣市教育委員会 2009年

『岐阜県史跡 旗本西高木家陣屋跡一測量調査・発掘調査報告書一』 大垣市教育委員会 2013年

名古屋大学附属図書館2015年春季特別展（地域貢献特別支援事業成果報告）

西高木家陣屋と高木家文書

— 西高木家陣屋跡国史跡指定記念 —

発行日 2015年2月26日

編集・発行 名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 B3-2(790)

TEL : 052-789-3678 (受付) FAX : 052-789-3694

<http://www.nul.nagoya-u.ac.jp/>

ISBN 978-4-903893-13-6